

目次

1. はじめに

2. 文学の役割とは

2-1. 目的からの独立

2-2. 文学の権力的利用

3. 結論

1. はじめに

現代の日本では一般的に、文学は社会的に必要なと考えられている。なぜなら社会的に必要なかどうかという判断は、それが社会ですぐに役立つか否かという物差しで主に行われているからである。目に見える成果は誰もが即時的に理解できるため、判断基準として一般に受け入れられているといえる。

しかし、文学が社会で役立つかというのはにわかに即断し難い。それゆえ、文学は社会的な舞台から徐々に排除されつつあるというのが現状である。そのような状況下で、われわれは文学に何らかの役割を与えるべきなのだろうか。

トインビーと池田による対談集『二十一世紀への対話』で、両者は「文学に役割を与えるべきではない」という見解を一貫して示している。また、文学は何物にも制限されるべきではなく、独立した存在として追求することで本来の役割を果たすとも述べている。彼らに対談を行ったのは今から約半世紀前であり、現代とは社会的背景が大きく異なるが、この問題は半世紀経った今でもなお、われわれにとって重要な意義を持つと考えられる。

彼らの見解は半世紀経った現代でも通用するのか。二人の見解を基に、文学に役割を与えることで生ずる影響について考察していく。

2. 文学の役割とは

2-1. 目的からの独立

トインビーは「文学に何ができるのか」という問いに対して、その答えは科学的研究の有用性を問うことで明らかになるという。科学的研究は、何かを故意に目的としたり、現実的な目的の達成だけに限定したりすると、本来の役割を果たせずに終わってしまう。なぜなら、科学的研究はそれ自体を目的として追求するときに、初めて諸々の発見がなされるからである。彼はこうした思惑のない研究が生んだ諸発見のなかに、社会的に有用な応用がきく発見が存在するとしている。つまり、研究は目的から独立した存在でなければ本来の役割を果たさないということである。

これには実際に多くの企業がすぐには利益を生まない事業にも投資しているという例が挙げられる。宇宙開発や環境保護、科研費の提供などは長いスパンで取り組まなければならない事業だが、それにも関わらず積極的に投資が行われている背景には、トインビーのいう一見逆説的な理論が実際に証明されていることが窺われる。

トインビーはそれと同様に、「文学は、作家がその創造的衝動を表現する自発性に比例して、実際の効果を生むものだ」としている。このように文学も目的から独立した存在でなければならないというのだ。

彼はその例としてロシアの文学者トルストイを挙げている。トルストイは芸術を追求した自由な著述によって、富裕特権少数者の良心を呼び覚まし、その社会的影響は様々な形であらわれているというのである。

確かにトルストイの文学は芸術的に優れた作品が多い。それについてはナボコフも称賛の辞を惜しまない。しかし、トルストイの文学には二面性が存在するというのは多くのフォルマリストも指摘している。トインビーは次のように言っている。

「トルストイの人生に対する姿勢は、その“宗教的回心”を境として、二つの明確に異なる段階に分かれますが、それぞれの段階における彼のそうした姿勢は、出版された各作品の性格にはっきりと反映されています。回心以前、トルストイは、たんに衝動のおもむくまま、自由奔放に著述をして、創造的な文学を生み出していました。しかし、回心以後は、彼は芸術を追求するのは自己満足にすぎず、社会的にも無責任であると考えました。¹」

トルストイは文学を人類の福祉向上に捧げるべきだとし、以後、彼の作品はすべてその目的は功利的なものに限定されるようになってしまったとトインビーは指摘している。トルストイは以前から哲学に興味を持っており、作品にも多少なり思想性を帯びるといった傾向があったが、回心してからは更にその傾向は強まり、最終的には代表的な長編小説『戦争と平和』の最後にエピローグとして哲学的考察まで付け加えている。その結果、彼の作品の影響力は影を潜め、あまりにも思想性を帯びた作品に対して、多くの批判の前に立たされることになったのである³⁴。

また本来独立した存在であった文学に目的を与えたトルストイの主張は、当時のソビ

¹ 『二十一への対話・上』池田大作、A. トインビー、文藝春秋、1975年、pp.136

² 同上、pp.134-135

³ このことについてはバーリンの『ハリネズミと狐——『戦争と平和』の歴史哲学』（河合 秀和訳、岩波文庫、1997年）や本多秋五の『「戦争と平和」論』（鎌倉文庫、1947年）で詳しく論じられている。勿論批判だけではなく、後期の長編三部作に対しては芸術的な面では高い評価を得ている。

⁴ 「ヴォギュエは、エピローグ第二編をさして「長い哲学的付録」と呼び、当時のフランス語訳『戦争と平和』にこの部分の省かれているのは妥当だとした。」（『トルストイ論集』本多秋五、pp.384）

エト政府に利用されてしまったという歴史的事実もある。このように、文学は何物からも独立した存在でなければ本来の役割を失ってしまうのである。無論、このことは文学だけでなく芸術一般にもいえることである。

2-2. 文学の権力的利用

文学は多少なりとも思想性を帯びているものである。それは否定し難い事実であるが、それに目的を与えることによって、文学は更に本来の役割を失っていく。トルストイはその点についても指摘している。

「ソ連の共産主義政権は、回心後のトルストイの、文学の役割に関する見解を取り入れています。ソビエト政府では、文学作品は社会福祉の向上のために利用すべきだという立場をとっているわけです。(…)つまり、ロシアの共産主義者たちにとって、社会福祉とは、共産主義思想の拡張とソビエト政府の権力拡大を意味しているのです。(…)ソビエト政府はこのような方針の結果、ロシア文学の文学的価値と、その社会的影響性とは、いずれも著しく低下してしまいました。⁵⁾

トインビーの指摘したことは尤もである。なぜなら、それと同様の歴史的事実が多く存在するからである。ドイツ文学はナチスドイツによってプロパガンダとして扱われ、南京事件の際も事実と称して文学はプロパガンダとして利用された背景があるからである。

それに対して、池田も次のように述べている。

「ある特定のイデオロギーのために文学を利用しようとするのは、正しい文学のあり方を歪めるばかりか、それが政治権力によって行われるならば、人間の基本的な権利である表現の自由をも踏みじめることとなります。⁶⁾

文学が僅かでも思想性を帯びている以上は、イデオロギーのために利用されないという保証はない。そのイデオロギーに対して善悪の判断を鑑みずとも、プロパガンダという目的を与えられた文学は、自由な創造性を失い、たんに思想伝達的手段として扱われているに過ぎないといえる。

「科学者と同様、文学者の場合も、自由な精神の発露が真に偉大な作品を生むのであって、もし社会的な目的によって文学が何らかの制約を受けるとしたら、そこからは真実の文学は生まれてはこないでしょう。たとえ文学が、飢えたる人々に対して何も

⁵⁾ 『二十一への対話・上』池田大作、A. トインビー、文藝春秋、1975年、pp.137

⁶⁾ 同上、pp.136

しえなかったとしても、文学の目的が限定されたり、自由な創造の芽が摘まれてしまうようなことがあってはなりません。(…) 歴史上の教訓に照らしても、イデオロギーの桎梏に縛られた文学、広く普遍的な共感ができないのは明らかです。⁷⁾

このように、文学に制限を与えることは、文学本来の、物事の価値を問うという役割を失わせ、無条件に一つの思想に傾倒してしまう可能性があるということは明らかである。一つの思想に傾倒するということは歴史を顧みても悲惨な結果を招きかねない。表現の自由を確保するためにも文学には目的を与えるべきではないといえよう。

3. 結論

このように、文学に役割を与えることで生ずる影響について考察してきたが、文学には役割を与えるべきではないということが分かった。なぜなら、文学に役割を与えることによって、権力が文学を利用する可能性があるからである。

本来、文学には社会問題をすぐに解決できる力があるわけではない。文学が社会的な効力を発するとすれば、それは思いがけず訪れた副次的な発見があった場合か、権力と結びついてたんにイデオロギーの伝達に利用される場合のみである。

文学が権力によって利用されれば、人間の基本的人権の一つである表現の自由を失うことに繋がり、本来の文学の役割を失うことになってしまう。その結果、文学は人間の自由な創造性や精神の発達を妨げるものになってしまう。文学を通じて人間感情を表現することを否定すれば、われわれは機械や動物と何ら変わらない存在となり下がることになるだろう。

文学は文学そのものとして価値があり、また物事の価値を判断するために教養としてわれわれは文学を学ぶべきなのである。文学を必要としない社会は人間としての基本的人権としての表現の自由を放棄した社会である。そのような社会にしないためにも、文学は社会的な役割を必要とせずとも、社会において有用なものであるといえる。

⁷⁾ 同上、pp.137